



Round Table Discussion

兵頭一之介

司会

Ichinosuke HYODO

筑波大学医学医療系消化器内科学
教授

市川 度

Wataru ICHIKAWA

昭和大学藤が丘病院
腫瘍内科・緩和医療科教授

山崎健太郎

Kentaro YAMAZAKI

静岡県立静岡がんセンター
消化器内科治験管理部長
兼消化器内科医長

北野滋久

Shigehisa KITANO

国立がん研究センター中央病院
先端医療科

大腸癌薬物療法関連バイオマーカー研究の 進歩と臨床応用

次 世代シーケンサー (NGS)による網羅的な遺伝子解析が、がんの成因や病態に関する知識を飛躍的に増加させ、それと相まって標的分子に対する薬剤開発が臨床成績を改善した。最近では抗CTLA-4抗体や抗PD-1抗体などの免疫チェックポイント阻害薬の登場により、がん免疫が脚光を浴び、さまざまな薬剤開発とともに精力的にがん免疫寛容(逃避機構)に関する研究が進められている。Precision medicine時代に突入した今、大腸癌の領域でも薬剤選択や予後予測・効果予測に用いられるバイオマーカーの研究が進んでいる。本座談会ではこれら研究の全体像を整理し、バイオマーカーの意義とこれからの展望について議論いただいた。

大腸癌の大規模バイオマーカー研究の現状

1. 大腸癌の分子生物学的分類：

consensus molecular subtype (CMS)

兵頭(司会) 次世代シーケンサー (NGS)を用いた遺伝子解析の飛躍的な進歩と抗PD-1/PD-L1抗体薬の登場により、いまや免疫療法は悪性腫瘍に対する標準治療の一部に

組み入れられつつあります。残念ながら大腸癌の免疫療法の開発は他のがん種に比べ若干遅れをとっていますが、新規性の高い併用療法の話も出てきており、本日はがん免疫も含めて大腸癌に対する薬物療法のバイオマーカーについて最新知見の紹介とそれらの役割、将来性についてディスカッションを行いたいと思います。

まず初めに、市川先生から大腸癌の大規模バイオマー